

谷口守著『入門 都市計画 都市の機能とまちづくりの考え方』

森北出版株式会社 2014年10月14日 146ページ

東京大学大学院工学系研究科 浅見 泰 司

現在、都市計画の教科書は、解説本も含め数多い。しかし、多くの本は残念ながら都市の成立や発展のメカニズムに関する記述が少なく、結果として、大量な制度解説や事例解説に陥っていて、都市計画の本質を理解できないまま終わっている。本書は、そのような既存の教科書の限界を打破した、画期的な教科書である。

まえがきで、「現在の制度を最初に頭に入れてしまうと、人間というものは不思議なもので、その制度が正しいという前提のもとで、その制度を守るための行動を取るようになります」と書かれているが、けだし、このことは著者が数多くの都市計画関連事案で経験した苦い思い出に基づいているのではないと思われる。そして、この教科書はこの傾向を打破するための、都市計画教育上の革命の試みであると言えるだろう。

以下、この本の特色をいくつか紹介し、書評に代えたいと思う。

第一の特徴として、本書はメカニズムの理解を重視している。都市計画の教科書がホテリングモデルから始められているのは、おそらく、他にはないのではないかと推察する。ホテリングモデルは立地競争する2店が均衡では中心部に集まってしまうことを示したモデルである。このモデルは、競争→集中という空間的なパターンが、市場の力で形成されることを簡便に表すものであるが、これによって、読者は都市の営みが市場という目に見えない力で形成されていくことを理解する。続いて、土地利用配置も都市の集積も都市のライフサイクルも、背後にメカニズムが働いていることを理解でき、メカニズムに対する理解の重要性を感じ取ることができる。

第二の特徴として、極めてバランス良く都市計画の要素を並べている点である。都市計画には様々な要素や配慮すべき価値が含まれており、それをバランス良く配置することは容易ではない。本書は著者によるレクチャーノートを教科書化したものであるとのことであるが、長年かけて講義内容を推敲した結果得られたバランスなのではないかと推察する。講義では、学生に動機を持たせ、内容を解説する。特に、この動機部分は、世にある解説本では略されることも多く、これが理解を妨げる要因になっていることもある。本書では、適度に動機を持たせる記述があり、ストーリー展開を大事にしながら解説を行っている。そのため、記述が有機的につながり、理解を深める内容に仕上がっている。

第三の特徴として、内容が厳選されている。本書は、「入門」都市計画であるから初学者にわかりやすく記述しなければならない。そのためには、専門性が高くなりすぎてはいけないうし、かといって、最低限必要な事項は網羅しなければならない。このことは、専門家にとっては難しい。どうしても、自分の専門は詳述し、あるいは、専門的な深さを披露したくなる誘惑にかられる。しかし、本書では、そのような誘惑を絶ち、専門性を適切に抑えた記述に終始している。その結果、一文一文に込められた意味は非常に深く、どの一文も欠落することが許されないぐらいに、文章が厳選されている。また、ちりばめられた図についても、必要不可欠なものであり、また、理解を助ける写真なども、おそらく著者が長い間かけて集めたものから厳選して、取り入れていると思われる。

第四の特徴として、現代的な課題を豊富に取り入れている。現代の都市計画に求められる縮退傾向への対処、高齢化への対処、地球環境問題への対処、透明性確保への対処、客観性確保への対処などを随所に取り入れ、適切な解説とともに都市計画の役割を浮き彫りにしている。これは、現在、一線で活躍

しているプランナーが、どうすれば良いのかについてもヒントを与えてくれ、また、自分達の役割を確認することにも一役買っている。

第五の特徴として、コンパクトながら、著者の主張も随所に取り入れている。先に述べた都市計画における思考停止という硬直性に対する批判、行動変容を求める記述、志を高める重要性を述べている「都志計画」という記述、プランという用語の用法の混乱を指摘した記述、そして、都市計画を画一的な原則で割り切ろうとすることに対する批判など、著者の長い経験で遭遇したと思われる問題点を的確に批判し、主張を展開している。

本書は、入門都市計画と初学者を対象にした教科書でありながら、同時に、都市計画に関わる専門家に対するメッセージを数多く秘めた啓蒙書にもなっている。専門家の方々には、本書を初学者に勧めるだけでなく、自らも熟読して、その根底にある考え方を自己の日々の業務に活かしていただきたいと思う。都市計画に関わろうとする方、現に関わっている方の双方に是非とも読んでいただきたい珠玉の著書である。